

2012年度 日本認知言語学会 ワークショップ要旨

タイトル：「場の言語学とは何か」

本ワークショップは、場の理論に基づいた言語学としての「場の言語学」の原理を紹介し、ケーススタディを通して、「場の言語学」の理解を深めることを目的とする。

司会・発表者 A は、「場の言語学と認知言語学—その統合と発展」と題して、場の言語学と認知言語学の統合可能性について論じる。まず、認知言語学の哲学的基盤と場の理論の親和性について触れ、図と地、フレーム、参照点構造など認知言語学の基盤をなす理論、道具立てが、「場所と個物」という場所理論的關係で統一的に説明できるということを明らかにする。その上で、認知言語学でとりあげる「場」の限界性にも触れ、認知言語学がより普遍的で広範な言語現象を扱うために場の言語学がその理論的補完となりうる事を明らかにしていく。

発表者 B は「言語学における場の理論とは何か」と題して、場の言語学の基本原理について明らかにする。近代社会は、ニュートン力学をモデルとして、主観と客観とを分離し、また人間社会の事象を個の要素に還元し、個物からすべてを組み立てる要素還元主義に立脚して発展をしてきたが、現代科学は、主観と客観とは分かれた存在ではないことを明らかにし、個物と個物とを別の存在として捉える要素還元主義だけでは説明できない事象があることを明らかにしてきている。このような近代の「個物と因果関係のパラダイム」に加えて、今必要とされているのは、複雑系を含む現代物理学をモデルとした「場と相互作用のパラダイム」に立脚した思考である。現代の脳科学は、主観と客観とが脳という場に於ける相互作用を介して生まれてくることを明らかにし、現象学や生物学は、自己と他者、個物と個物とが完全に分離された存在ではなく、相互身体的な、場に於いて相互に作用する存在であることを明らかにしつつある。学問の対象を孤立した「もの」としてではなく、場に於ける相互作用という「こと」として捉えるのが場の理論である。実際の言語現象も、このような場の理論の視点から捉えることにより、より具体的で明確な説明が可能になると考えられる。すなわち、現代科学における主客非分離、自他非分離の視点から言語を捉えるのが言語学における場の理論である。

発表者 C は、「場における身体性と言語」と題して、場の理論と身体性、コミュニケーション論について論じる。発表者の専門領域である異文化間コミュニケーション研究においてこれまで文化相対主義的な立場に立った「異文化理解」型のアプローチで捨象されてきたのが、言語などの記号体系により概念化されないものの、身体知として授受、共有される非記号的情報を通じた共感的理解の可能性である。一般に「場」の理論では、そうした非記号的情報授受の主体としての「身体」を媒体としたコミュニケーションが相互に整合的な関係生成と全体としての文脈の共創の基盤をなすとされるため、異なった記号・意味体系をもつ文化間でも「場」的原理による関係構築は理論上可能である。本発表では、そうした「場」による関係構築の間文化的普遍性を担保すると考えられる「身体性」の本質と特性について現象学的身体論および生態学的認識論からの知見をもとに発表者が行った考

察の一端を紹介し、「場」的原理による関係生成における「身体性」の意味と機能の解釈的提示を行うとともに、そうした「身体性」の延長としての言語の特質および「場」を通じた創発・共創における記号体系としての言語による概念化の位置づけを論じる。また、身体性の文化的側面に言及しつつ、間文化的協働に寄与しうる身体的コミュニケーションについての考察も試論として提示する。

発表者 D・E（共同発表）は「場の理論からみた言語」と題して、場の理論の言語学への応用可能性と、その実証例を提示する。「場の言語学」とは、近代科学の中で発達してきた言語学のあり方を補完する可能性をもつ、言語を考えるアプローチの一つである。これまでの言語学は、人間を主体とする人間中心的天動説的な見方によるものであったが、場の言語学では、人間は、地球という場を居場所とし、場の中に一要素として埋め込まれていると考える。人間は二重生命(dual mode thinking)を基本としており、その振る舞いは即興劇をモデルとして考えられる。また、「場の言語学」では、明示的コミュニケーションだけでなく暗在的コミュニケーションをも視野に入れる。そして、言語へのアプローチは、言語現象を内面的視点で捉える。本発表では、①主語・述語の省略、②能格言語構文、③敬語使用・不使用の交替現象、④共同作業の談話などを例に取り上げることで、場の理論の視点による言語現象の解釈および再解釈を提示し、それが従来の言語研究を補完することを明らかにしたい。

参考文献

城戸雪照（2003）『場所の哲学』文芸社

清水博（2003）『場の思想』東京大学出版会